

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：32688

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320072

研究課題名（和文）文化大革命と中国の知識人

研究課題名（英文）The Cultural Revolution and Chinese Intellectuals

研究代表者

佐治 俊彦（SAJI TOSHIHIKO）

和光大学・表現学部・教授

研究者番号：70100435

研究成果の概要（和文）：1966年から10年間、中華人民共和国を席卷した文化大革命（文革）について、その主たる批判対象となった知識人をめぐる問題群を整理し、中国の知識人たちの文革認識を総合的に考察した。文学研究、思想研究、社会・歴史研究の3グループを作り、それぞれの分野から、中国知識人の文革当時における現状認識と、文革終結から30年を経た現在における文革への思いを調査・研究した。また、北京で銭理群氏、王得后氏、孫歌氏、趙京華氏を長時間インタビューし、香港中文大学所蔵の膨大な文革資料を閲覧、一部提供を受けたほか、東京に徐友漁氏を招いて公開の国際シンポジウムを開催した。

研究成果の概要（英文）：From 1966 through 1976, the Cultural Revolution swept over People's Republic of China. During the decade, many intellectuals in China were exposed to harsh criticism. We first marshaled the issues concerning those intellectuals and then made a comprehensive study of their perception of the Cultural Revolution. The members of this study were divided into three groups, namely the literary research group, the philosophical research group, the social and historical research group. Each group employed its own way to investigate Chinese intellectuals' perception at the time of the Cultural Revolution and their thoughts on it today, thirty years after the end of the Cultural Revolution. Furthermore, in Beijing we had long interviews with Mr. Qian Liqun, Mr. Wang Dehou, Ms. Sun Ge and Mr. Zhao Jinghua respectively, and at Chinese University of Hong Kong we had a chance to peruse a huge amount of materials concerned with the Cultural Revolution in its collection and were offered a part of the materials. In addition to these, we held an open international symposium in Tokyo, inviting Mr. Xu Youyu to be a guest speaker.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成22年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
23年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
24年度	2,000,000	600,000	2,600,000
総計	11,000,000	3,300,000	14,300,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：

キーワード：中国文学・東洋史・社会学・文化大革命・知識人

1. 研究開始当初の背景

2007年から3年間、研究代表者は研究課題「文化大革命の文化史的再考」で科研費（基盤研究(B)）の公布を受けた。同課題に取り組む中で、中国知識人の文革への態度がクローズアップされるとともに、いまなお文革を研究の俎上に上げることが制限されている中国在住の中国人研究者から、知識人問題としての文革研究をより一層深め、文革に関する忌

憚のない考察を進めるよう強く要望された。本研究は「文化大革命の文化史的再考」における問題意識を継承しつつ、より文学的・思想的課題に力点を置いたものとすべく、研究分担者を選定し、研究協力者を募った。

2. 研究の目的

(1) 文革は、1966年から1976年に中華人民共和国に生きた全中国人に何らかの影響

を与えた。多くの場合、彼らは被害者であるとともに加害者であり、それゆえ自らの文革体験を語りたがらない。しかし、中国における知識人の中には、率先して自らの被害者性だけでなく、加害者性にも目を向け、そこに批判的考察を加える人々がいる。本研究が主たる対象とするのは、彼ら良心的知識人の文革認識である。一方で、文革の肯定的側面を強調する知識人も存在する。彼らは自身の青春時代を懐かしむと同時に、文革が持っていた平等を志向する点を評価する。そうした「肯定派」についても、考察の対象とする。

(2) 文革前、あるいは文革中に作家・芸術家・研究者として活動した知識人の多くは生業を奪われ、あるいは虐待を受けて死亡した。また、生存のために文革の現実と一定の折り合いを付ける必要に迫られた。彼ら一人一人の選択は、人間の生の在り様の複雑さを活写している。近年数多く出版されるようになった知識人の回想録や日記等を読解しながら、当時の中国知識人の文革認識を抽出し、考察を加える。

(3) 文革中、農村部に送られた知識青年や、生業を断たれ追放された知識人によって、密かに綴られた文学作品がある。それらのほとんどは詩作品であり、文革中の詩創作は近年「地下詩壇」として知られるようになった。中国では文革をストレートに語るができないため、「地下詩壇」に対する純粋に文学的な研究が進められ、それが数少ない文革研究の一潮流となっている。本研究も中国人研究者と連携しつつ、文革期詩歌について考察する。

(4) 文革期の知識人政策について、歴史研究・社会学研究の視点から再考し、個々の知識人が選択した立場の必然性を明らかにする。

(5) 中国の人口の9割強を占める漢族だけでなく、いわゆる少数民族にも文革は多大な影響を及ぼした。漢族とは異なる独特の文革認識を持つ少数民族知識人も考察の対象とする。本研究においては、特にモンゴル人およびモンゴル族知識人をとり上げる。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者・研究分担者に連携研究者と研究協力者を加え、「文学」「思想」「社会・歴史」の3グループを構成する。各グループ内では日常的に情報を交換し、定期的に会合をもつ。年に2~3回3グループ合同の研究会を開き、意見交換をはかる。

(2) 科研費課題「文化大革命の文化史的再考」で収拾し、目録を発行した文革関連資料を整理しつつ、増補に努める。国内で刊行された研究書・資料集等を購入するとともに、海外の研究機関に協力を依頼し、所蔵資料の閲覧や提供を受ける。

(3) 中国の知識人に対しインタビューを行う。成人後に文革を実地に体験した世代、青年期に文革を経験した世代、文革終結前後に生まれた若い世代それぞれに聞き取り調査を行い、世代ごとの傾向を把握するとともに、世代間の共通項と相違点を明らかにする。

(4) 海外から研究者を招いて、国際シンポジウムを開催する。シンポジウムは一般公開し、海外の研究者の講演と併せ、本研究の成果の一端を広く市民に公表する。

4. 研究成果

(1) 海外訪問調査の成果

①2011年3月21日~3月25日に北京を訪問し、元北京大学中文系教授・銭理群氏、元魯迅博物館副館長・王得后氏にインタビューを実施した。両氏とも、文革期に迫害を受けた経験を持ち、文革終結後は20世紀中国文化研究(特に作家・魯迅に関する研究)をリードしてきた良心的知識人であり、日本人による文革研究にエールを送って下さっている。お二人からご自身の文革体験を伺い、銭理群氏からは2009年に台湾で連続講義として口頭で発表され、2012年に大著『毛沢東時代と後毛沢東時代』(台北・聯経出版、邦訳は『毛沢東と中国——ある知識人による中華人民共和国史』青土社、2012年)にまとめられる氏の文革研究の背景や、使用した大量の資料についてご説明いただいた。その後、北京大学中文系教授・高遠東氏、同副教授・王風氏を交えて、非公開で座談会を行った。また、中国社会科学院文学研究所研究員・孫歌氏、同・趙京華氏、中国当代文学研究会会長・白燁氏とも会談し、三氏の文革体験と、現時点での文革に対する思いを語っていただいた。銭氏・王氏とは20~30歳年少となる三氏においては、文革そのものに対する批判的見解とともに、青少年時代の懐かしい思い出としても文革が回想されており、現在第一線で活躍する中国知識人の中で、文革に対する構えに世代差が存在すること、その差は世代間の断絶には必ずしもつながっていないものの、現代中国社会を考察する際のスタンスに一定の影響を及ぼしていることが明らかとなった。

②2012年3月26日~3月30日、香港中文大学で資料調査を行い、同大学に在籍する研究者との意見交換会を実施した。同大社会科学政治與行政学系教授・王紹光氏には文革に関する多数の専著があり、王氏をはじめとする同大の社会科学分野の研究者から文革研究に関する意見をうかがえたのは僥倖であった。かつてイギリス領であり、現在特別行政区である香港では、中国の政治・社会に対する批判的な研究が相対的に自由であり、香港中文大学は文革研究の世界的一大拠点ともなっている。同大中国研究服務中心には膨大な文革研究資料が所蔵されており、今回は先方のご好意により、それら資料を長時間閲覧し、一部複写の提供を受けることができた。また、香港在住の詩人・也斯(梁秉鈞)氏と面会し、文革や現代中国社会・文化に関

する意見をうかがう機会を得た。也斯氏は当時すでに肺癌を患っており、2013年1月に他界されることになったため、我々の訪問は、日本人研究者との最後の長時間対談となった。そのほか、香港中文大学の若手研究者多数と交流する機会を持った。彼らの中には、日本の中国研究を数多く参照している者もあり、文革研究のみならず、広く20世紀中国の社会・文化に関する活発な討論が行われた。

(2) 公開講演会・シンポジウムの成果

①2011年10月27日、日本を訪問中の蘇州大学文学学院院长・王堯氏を招き、東京大学東洋文化研究所において公開の講演会を開催した。講演テーマは「“矛盾重重”的過渡状態——“文革文学”与“新时期文学”関連性研究」であった。王氏は「文革文学」という概念をいち早く提示し、文化的に不毛の時代とされてきた文革期における文学を巡る思想・批評・創作の在り様を丹念に拾い集め、その文革以前（20世紀前半の中国近代文学）との関連、文革後（文革終結以降の「新时期文学」）への影響を解明し、文学史の中に位置づける作業を行っている。今回の講演は、「文革文学」と「新时期文学」の影響関係を、氏のテキスト分析を開陳しつつ論じたもので、関東在住の中国人留学生、大学院生をはじめとする多数の来聴者を得て、活発な議論が行われた。

②2011年12月4日、和光大学において、ドキュメンタリー映画『亡命』の上映会と、同映画の監督・翰光氏による講演会を開催した。本作品は、1989年の第二次天安門事件以降に海外へ亡命した第一級の中国知識人たち（作家・詩人・芸術家・政治活動家・宗教家）へのインタビューからなり、人間の「精神の自由」を考える際のヒントを数多く提示している。映画のテーマは、直接に文革と知識人を巡る議論とも重なるものであった。上演会には、一般市民を含む数十名が来場し、翰光氏の日本語による講演、作品解説も好評であった。

③2012年12月2日、町田市文化交流センターにおいて、国際シンポジウム「21世紀中国文化と知識人」を開催した。当初は、中国から数人の講演者を招聘し、日本側講演者数名と併せて規模の大きなものを予定しており、そのつもりで準備作業を進めた。しかし、尖閣諸島を巡る日中両国間の軋轢が生じ、規模は縮小せざるをえなくなった。そうした中、現代中国を代表する思想家で元中国社会科学院哲学研究所研究員・徐友漁氏が万難を排して来日され、また首都師範大学中文系教授・王家平氏は書面参加という形ではあったが講演原稿を寄せられた。徐氏の講演テーマは「中国作家にみる文化大革命への懺悔意識」、王氏の原稿題目は「文化大革命期中国

“追放者詩人”の生存と創作」（来聴者に翻訳を配付）であった。徐友漁氏の講演は、数名の新時期（文革後）作家の対文革意識を「懺悔」という点から分析し、知識人の文革における加害者性の認識が必ずしも十分でない点、文革の正の側面を強調する者だけでなく、負の側面を十分に意識している作家さえもが「懺悔」を回避している点を明らかにし、そのことが文革に対する総括を阻碍し、現代中国社会の種々の問題を作り出している可能性を提示した。王家平氏の原稿は、文革中に追放あるいは迫害された詩人たちの事績と、彼らが秘密裏に創作した詩歌を紹介し、そこに見られる抵抗と反攻の精神を評価するものであった。日本側講演者の加藤（高見澤）三由紀（研究分担者）は、「ノーベル文学賞作家・莫言の描く中国」と題した講演を行い、ノーベル賞作家・莫言の経歴、彼の日本との関わりについて紹介した後、莫言作品群を時系列で論じ、抑圧への抵抗を生む「精神の自由」と対比的に描かれる「退化」（屈服する人間）に注目し、それが作品中でしばしば「懺悔」を導く様が確認された。講演終了後、徐友漁氏を囲んでパネルディスカッションが行われ、清華大学教授・王中忱氏、佐治俊彦（研究代表者）、岩佐昌暲（研究分担者）、江上幸子（同）、宇野木洋（同）、松浦恒雄（同）から、それぞれ問題提起がなされ、来聴者からの質問、徐友漁氏による応答をふまえて討論が進行した。当日は一般市民を中心に80名以上が来場し、大変な盛会となった。シンポジウムの内容は、報告集『国際シンポジウム「21世紀中国文化と知識人」の記録』にまとめ、全国の研究者に配付した。

(3) 3グループ合同研究会の成果

「文学」「思想」「社会・歴史」各グループの日常的な議論とは別に、合同の研究会を下記の通り開催した。研究会に外部から講演者を招いた場合は、外部からの来聴者も事前に申し出があった場合に限り受け入れた。

①2010年6月20日、静岡大学人文社会学部教授・楊海英（日本名：大野旭）氏を招き、本郷三丁目・ホテル機山館にて講演会を開催した。講演テーマは「内モンゴルにおける文化大革命とモンゴル族知識人」であり、文革期中国における少数民族政策を、モンゴル族の事例から批判的に考察した。楊氏は著書『墓標なき草原』（岩波書店、2009年）を上梓されており、当日は同書をふまえた上で、参加者全員による質疑応答・討論が行われた。また、講演会終了後、各グループの研究計画と、議論の進展について報告された。

②2010年12月19日、ホテル機山館にて、各グループ研究の進捗状況の報告会を行い、併せて北京訪問調査計画について話し合われた。

③2011年2月19日、ホテル機山館にて、愛知大学現代中国学部教授・樋泉克夫氏を招いて講演会を開催した。テーマは「香港から見た文化大革命」であった。樋泉氏は文革中に長期間香港に滞在しており、当時の見聞や収拾した資料について紹介された。講演終了後、翌年度の研究計画を確認し、各グループ研究の進捗状況について報告された。

④2011年7月10日、ホテル機山館にて、中央大学名誉教授・姫田光義氏（連携研究者）による講演「文化大革命と林彪」が行われた。姫田氏は著書『林彪春秋』（中央大学出版部、2009年）をふまえ、文革期の政治家・林彪と、「林彪事件」に関する現在までの研究史を概説した後、氏が林彪に取り組む際の問題意識について説明した。講演終了後、香港訪問調査計画について話し合わせ、各グループ研究の進捗状況が報告された。

⑤2012年2月17日、ホテル機山館にて、香港調査の事前準備が行われた。香港で面会する王紹光氏の著書『超凡領袖的挫敗——文化大革命在武漢』（香港中文大学出版社、2009年）を課題図書とし、研究代表者・分担者全員が事前に読み込んだ上で、同書の内容に関して討論が行われた。また、2011年度の研究計画の進捗状況と、2012年度の研究推進計画について確認された。

⑥2012年4月14日、ホテル機山館にて、社会学者・福岡愛子氏による研究発表「日本における文革認識——歴史的認識転換をめぐる『翻身』の意味」が行われた。福岡氏は前著『文化大革命の記憶と忘却——回想録の出版にみる記憶の個人化と共同化』（新曜社、2008年）で、中国人の文革に関する「記憶」の問題を重点的に考察しており、今回の発表では日本における文革、つまり文革に直接・間接に関わった日本人の意識を考察対象とした。対象となった日本人の政治的立ち位置や文革までの経歴と、文革礼賛から文革の消極的／積極的否定に向かう「翻身」（強制されたものではなく、半ば自発的になされた認識の転換で、当人の人生における画期となったもの）の在り様を対照させた上で、社会学的分析を施した。研究代表者・分担者の多くは、主として文学研究に従事しており、社会学者の問題設定方法に対する若干の違和感をうったえる者も出たが、福岡氏の調査・研究の精密さと、それにかかる熱意に賞賛の声が上がった。発表終了後、香港調査における各人の成果報告と、シンポジウムに招聘する講演者の人選が行われた。

⑦2012年11月3日、コンファレンス東京・新宿において、国際シンポジウムの事前準備が行われた。宇野木洋（研究分担者）が徐友漁氏の文革研究について、松浦恒雄（同）が王家平氏の文革期詩歌研究についてレポートした。宇野木レポートは、徐氏の問題意識

について高く評価しつつ、徐氏の文学者や文学作品のとり上げ方について文学研究者としての立場から若干の問題点を提示するとともに、徐氏が「自由主義派」を自任していることと関連して、現代中国知識人の二大流派である「新左派」と「自由主義派」についても総合的に論じた。松浦レポートは、すでに寄せられていた王氏の発表原稿について、中国現代詩研究史における位置づけを行うとともに、原稿中でとり上げられた詩人の選択や、詩創作の価値について、自身の王氏とは異なる観点を述べた。

⑧2013年2月17日、コンファレンス東京・新宿において、3年間の研究成果報告が行われ、併せて今後の成果公表方法について議論された。

(4) 国内外におけるインパクト

①中国知識人の文革体験を実地に聴き取る作業は、それを語ることがしばしば精神的苦痛を伴うものであるため、必ずしも十分に行われているとは言えない。中国人同士による聞き取りは、加害と被害の経験が複雑に絡み合っていること、文革の悲惨さを直接の研究課題とすることがタブー視されていることから、大変な困難を伴う。その一方で、文革が中国社会から忘れ去られることで、将来同様の過ちが出来ることを危惧する知識人が一定数存在する。我々の取り組みは、そうした良心的知識人の声を拾い上げ、彼らの声にならない声を広く世界に発信する端緒を開くこととなった。

②香港における文革研究の成果を確認し、香港在住研究者との人的ネットワークを構築したことにより、大陸の良心的知識人および文革研究者と香港の文革研究者を橋渡しする見通しが立つようになった。また、香港における文革研究の蓄積にアクセスできるようになったことで、日本の文革研究を一層深化・発展させるために必要な方法論について議論が可能になった。

③日本の中国文学研究者が中心となって文革研究を行うことにより、政治領域における対立としての文革ではなく、個人の「精神の自由」を考える上での重要なサンプルとして、文革を再認識することとなった。大所高所から俯瞰しただけでは眼に留まらない個々人の精神の問題、文革のミクロな事例に一層の注目が求められることを確認し、その一部はすでに研究成果として公表された。

④一般市民に対して、文革や天安門事件に関する平易かつ一定の深度を具えた講演や紹介を行ったこと、文革に対する批判的な言説が中国人自身によって試みられている事例を示したことで、日本人の中国に対する画一的な見方を微調整するきっかけを提示することができた。殊に2012年以降、日中関

係が陰悪化する中で、民間の二国間交流をより一層活性化する必要が叫ばれている。その際に、政治・外交上の問題としてとり上げられる中国像に欠けた視点を提示することは重要であり、中国知識人の文革に対する認識は、その限界も含めて、現代日本人の中国認識を複眼的なものに変えていく格好の素材となる。本課題の推進によって、そのことが改めて確認された。

(5) 今後の展望

2013年2月17日に行われた研究会にて、今後本課題における研究成果を書籍として公刊することが確認された。編集・出版に向けた会合を今後も定期的に設けることになる。同書においては、これまでに行った中国知識人へのインタビューや、講演の記録を再構成するとともに、研究代表者・分担者が進めてきた知識人論をまとめ、文革によって翻弄され、あるいは文革にコミットした知識人の事例を、今日的視点から幅広くとりあげる予定である。該書全体で文革をめぐる知識人の精神の在り様の多様さを浮き彫りにし、我々日本人が現代中国を考える際の一つの参照軸を提供したい。また、これまでに構築した人的ネットワークを維持・発展させることを目指す。その際に、和光大学が文革研究の一つの拠点としての役割を果たすべく、今後とも資料・施設の充実に努める所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 32 件)

1. 宇野木洋、「「古希」を迎えた毛沢東「文芸講話」——その軌跡と現在の評価をめぐって」、『季刊中国』、査読有り、第 111 号、2012 年、45-62 頁。
2. 福岡愛子、「周恩来の「特派員」が見た国交回復——対日工作者・王泰平日記を読む」、『世界』、査読無し、第 835 号、2012 年、130-138 頁。
3. 西野由希子、「「食」をモチーフに香港を描く——也斯「FOODSCAPE」から『後植民植物與愛情』」、『季刊中国』、査読無し、2012 年、62-76 頁。
4. 松浦恒雄、「「民衆小説戯曲読本」について」、第二回日中伝統芸能研究交流会報告書『都市のメディア空間と伝統芸能』、査読無し、2012 年、77-104 頁。
5. 白井重範、「「現代文学」研究の遺産」、『麦灯』、査読無し、第 26 号、2012 年、105-130 頁。
6. 中津俊樹、「中華人民共和国建国初期におけるカトリック教会をめぐる動向について——「人民」の創出と「内心の自由」をめぐ

って」、『中国研究月報』、査読有り、第 768 号、2012 年、14-27 頁。

7. 代田智明、「大字報（壁新聞）外史——「延安整風運動」中心に中国の政治文化を考える」、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻紀要『ODYSSEUS』、査読有り、第 15 号、2011 年、19-45 頁。
8. 坂井洋史、「離散の語言体験——陶晶孫新論」、『中国現代文学研究叢刊』、査読有り、2011 年第 11 期、2011 年、86-101 頁。
9. 江上幸子、「『黄土の村の性暴力——大娘たちの戦争は終わらない』——共振する丁玲の小説と」、『季刊戦争責任研究』、査読無し、第 74 号、2011 年、2-7 頁。
10. 岩佐昌暁、「《民族詩壇》という雑誌」、『海外事情研究』、査読無し、第 39 巻第 1 号、2011 年、111-128 頁。
11. 金野純、「毛沢東時代の『愛国』イデオロギーと大衆動員」、『中国—社会と文化』、査読有り、第 26 号、2011 年、50-72 頁。
12. 佐治俊彦、「『殺劫（シャーチェ）——チベットの文化大革命』を看む」、『中国研究月報』、査読無し、第 758 号、2011 年、36-39 頁。
13. 宇野木洋、「ノーベル平和賞受賞者・劉曉波の思想に関する一考察——「原点」としての「全面欧米化」論」、『季刊中国』、査読有り、第 103 号、2010 年、64-78 頁。
14. 江上幸子、「戦時性被害という『恥辱』の語り——丁玲『新しい信念』の誤訳と削除から」、『近きに在りて』、査読有り、第 58 号、2010 年、32-43 頁。
15. 代田智明、「中国モダニティと思想改造——丸川哲史『魯迅と毛沢東——中国革命とモダニティ』を書評する」、『中国研究月報』、査読有り、第 752 号、2010 年、22-33 頁。

[学会発表] (計 23 件)

1. 西野由希子、「香港の『今』を描き続ける——也斯の文学を読み解く」、奈良大学総合研究所研究助成「中国語新聞『大公報』と 20 世紀の中国本土と香港の社会」研究会、2012 年 12 月 15 日、奈良大学。
2. 代田智明、「關於現代化与中国」、漢学与当今社会国際学会、2012 年 11 月 3-4 日、中国人民大学（中国）。
3. 松浦恒雄、「「民衆小説戯曲読本」について」、第二回日中伝統芸能研究交流会、2012 年 3 月 10 日、関西学院大学。
4. 江上幸子、「怎么写『女特務』」、中国女性文学第 10 回国際學術研討会、2011 年 12 月 20-22 日、厦門大学（中国）。
5. 坂井洋史、「林憾廬「無『心』的悲哀」与巴金「我的心」」、第十届巴金国際學術研討会、2011 年 12 月 1 日、上海市作家協会（中国）。
6. 加藤（高見澤）三由紀、「高速経済発展期的文学」、路遥与 80 年代文学的展開国際學術

研討会、2011年6月11日、中国人民大学(中国)。

7. 岩佐昌暲、「我們需要重新回到史料中去」、中国抗戰文史研究國際學術研討会、2010年12月19日、重慶師範大学(中国)。

8. 岩佐昌暲、「作為文献史料的報紙文章：記郭沫若1955年訪日的報道」、(郭沫若)文献史料國際學術研討会暨 IGMA 學術年会、2010年8月20日、山東師範大学(中国)。

9. 金野純、「毛沢東時代における大衆動員と革命イデオロギー」、中国社会文化学会2010年度大会、2010年7月11日、東京大学。

10. 金野純、「文革期の中国社会と暴力行為」、アジア政経学会東日本大会、2010年5月22日、北海道大学。

〔図書〕(計21件)

1. 岩佐昌暲、汲古書院、『中国現代詩史研究』、2013年、全439頁。

2. 坂井洋史、汲古書院、『逸脱と啓示——中国現代作家研究』、2012年、全470頁。

3. 金野純、風響社、岩間一弘・金野純ほか編『上海——都市生活の現代史』、2012年、全350頁(1-5、105-172、177-179頁)。

4. 白井重範、北京大学出版社、王風・白井重範編『左翼文學的時代——日本中国三十年代文學研究会論文選』、2011年、全376頁(271-290、372-376頁)。

5. 金野純、勁草書房、鴨川明子編『アジアを学ぶ：海外調査研究の方法』、2011年、全227頁(115-128頁)。

6. 坂井洋史、復旦大学出版社、『懺悔と越界——中国現代文學史研究』、2011年、全348頁。

7. 江上幸子、岩波書店、砂山幸雄ほか編『新編・原典中国近代思想史6』、2011年、全412頁(398-400頁)。

8. 代田智明、三重大学出版会、『現代中国とモダニティ——コウモリのポレミック』、2011年、全330頁。

9. 坂井洋史・張新穎、山東教育出版社、『現代困境中的語言和文化形式』、2010年、全232頁(1-4、43-160、188-232頁)。

10. 江上幸子、岩波書店、村田雄二郎ほか編『新編・原典中国近代思想史5』、2010年、全392頁(255-259頁)。

〔その他〕

新聞報道「中国文革期の文學活動に注目——熊本学園大外国語学部・岩佐昌暲教授(70)」『熊本日日新聞』文化欄、2012年6月29日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐治 俊彦 (SAJI TOSHIHIKO)

和光大学・表現学部・教授

研究者番号：70100435

(2) 研究分担者

岩佐 昌暲 (IWASA MASA AKI)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：60136546

小谷 一郎 (KOTANI ICHIRO)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：60136009

代田 智明 (SHIROTA TOMOHARU)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：60154382

下出 鉄男 (SHIMOIDE TETSUO)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：40196548

江上 幸子 (EGAMI SACHIKO)

フェリス学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：90277955

高見澤 三由紀 (TAKAMIZAWA MIYUKI)

和光大学・表現学部・教授

研究者番号：70204500

宇野木 洋 (UNOKI YO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40168737

松浦 恒雄 (MATSUURA TSUNEO)

大阪市立大学・文学研究科・教授

研究者番号：20173792

坂井 洋史 (SAKAI HIROBUMI)

一橋大学・言語社会研究科・教授

研究者番号：80196047

西野 由希子 (NISHINO YUKIKO)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：40262357

白井 重範 (SHIRAI SHIGENORI)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：40365507

金野 純 (KONNO JYUN)

学習院女子大学・国際文化交流学部・講師

研究者番号：80553982

(3) 連携研究者

姫田 光義 (HIMETA MITSUYOSHI)

中央大学・経済学部・名誉教授

研究者番号：10096159

(4) 研究協力者

王 中忱 (WANG ZHONGCHEN)

清華大学(中国)・中国語言文学系・教授

福岡 愛子 (FUKUOKA AIKO)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

中津 俊樹 (NAKATSU TOSHIKI)

歴史研究者・日本現代中国学会会員